

会議の概要（議事録）

会議の名称	(番号) 1-38	令和6年度第2回 墨田区図書館運営協議会		
開催日時	令和6年5月26日（日） 午前10時から12時まで			
開催場所	墨田区立ひきふね図書館 5階会議室			
出席者数	<p>【委員】11名 日向 良和（会長）、今井 福司（副会長）、駒田 るみ子、 金 豊子、矢島 真理子、齊藤 宮子、正岡 恵子、津村 しづ恵、 森 恵子、口中 常嘉、横井 貴広</p> <p>【事務局】 ひきふね図書館長、ひきふね図書館次長、ひきふね図書館主査、 ひきふね図書館担当職員3名</p>			
会議の公開 （傍聴）	公開(傍聴できる)	部分公開(部分傍聴できる)	傍聴者数	0人
	非公開(傍聴できない)			
議 事	<p>議事第1 令和5年度図書館利用アンケートの結果報告について</p> <p>議事第2 墨田区こども読書活動推進計画（第5次）の策定について （方針・目標の確定、乳幼児期の施策）</p>			
配 付 資 料	<p>次第</p> <p>資料1 図書館利用者アンケート結果報告</p> <p>資料2 基本方針ワークシート</p> <p>資料3 基本方針ワークシート2</p> <p>資料4 令和5年度イベント・展示一覧</p> <p>参考資料 目標を考える上での資料</p>			
会 議 概 要	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの読書に関するアンケート結果について（1-2P） ・墨田区こども読書活動推進計画（第5次）の策定について 基本方針（目指す将来像）について（2-7P） 基本目標について（7-9P） ・令和5年度図書館イベント・展示について（9P） ・その他連絡事項等（9P） 			
所 管 課	ひきふね図書館（電話：5655-2350）			

■議事第1

・事務局 資料1 令和5年度図書館利用アンケートの結果報告について説明

・日向会長

アンケートについて、意見質問はあるか。

・津村委員

問6にある「地域資料」とはなにか。

・事務局

墨田区にかかわる資料で、市販されていないなどの理由で出回っていない資料も含むものである。例えば区内の企業の社史なども収集・保存している。

・津村委員

学校でまちの探検等を行った際に、パンフレット等をもらうが、子どもは紛失してしまうことも多い。墨田区にゆかりがある資料が、総覧できるようになっていれば良い。子どもにとって見やすい資料が集まっていれば良いと思う。

・事務局

子ども向け地域資料は私たちも重視している。市販されていない資料であるため、他の部署、例えば産業振興課などと連携して充実していきたい。

・正岡委員

「改善してほしい書架」の1位はDVDという結果であるが、葛飾区の金町図書館では常時3,500本くらい書架にあり、すべてジャンル別に整理され配架されている。ひきふね図書館は分類が雑多であり、常時配架している本数も少ない。もっと充実をしていただきたい。

・事務局

墨田区もある程度所蔵しているが、書庫にあるものもある。予算の問題もあるので、個人で買うべきもの、公共で買うべきものなどの考え方の整理と合わせて検討していく。

・齊藤委員

問9にある「NPS値の経年変化」について、概ね上昇しているが、緑図書館だけ右肩下がりになっている原因は何か。

・日向会長

指定管理者とも結果を共有しながら、今すぐは難しくても分析をお願いしたい。

・矢島委員

問4について、若い世代（中高生）の回答が少ない。アンケートを配布していなかったのか。ティーンズルームや企画の充実のためにも、若い世代に向けたアンケートを実施しても良いのではないか。ひきふね図書館のティーンズのコーナーも、もっと利用してほしいので、若い人の声を聴き、若い人をより呼べると良い。

・事務局

中高生については別途アンケートを取ってあるので、そちらも参考にしながら施策を考えていきたい。

・日向会長

今回の調査の年齢層はやはり偏っていると思われる。特に13～18歳がほかの年代に比べ極

端に少ない。別途、何か機会があれば、もう少し詳しく聞いても良いと思う。アンケートの他に、実際に借りられている本から、統計的な分析なども行ってみても良いのではないか。電子書籍の利用頻度の回答結果についても、実際読み放題の対象となっている層の回答が少ないため、利用頻度が低いという結果になったものと思われる。

電子書籍について、去年の6月の導入から1年たった。購入すれば終わりの紙の資料とは異なり、電子書籍はライセンスの更新など、ランニングコストがかかる。2年たって借りられていない資料は更新しないのか、紙資料と同様、借りられていなくても所蔵していくのか。所蔵し続けていく場合は、より経費が増大するため、今後の更新の基本的な方針などの電子書籍の位置づけについて考えておいたほうが良い。個人的には、予算に限りがあるので、読まれる本だけ買い換えていくことが良いのではと思う。

■議事第3 墨田区こども読書活動推進計画（第5次）の策定について

・事務局 資料2 基本方針ワークシート

資料3 基本方針ワークシート2 について説明

・日向会長

目標や施策体系など、大枠を検討したいので資料2から議論する。

3つの基本目標ごとに、年齢別の事業をぶら下げるという体系を構築することで、事業の漏れはなくなる。

基本目標3は日本語として、文章がこなれていない。

・駒田委員

「出合（会）う」という表現について、最近「出合う」という表記が増えてきた。モノとのあい「出合う」で、人の場合は「出会う」と使い分けると簡単に説明されているが、国語的にはあまり賛同できない。本を人格化し、主人公として考える計画でもあるので、本との出会いであれば「出会う」が相応しいのではないかと考える。いずれにせよ図書館としての考えをしっかり持ち、安易に併記に頼るべきではない。

「子どもを主語」という考え方には賛成であり、文章が「子どもが」から始まるのは良いが、『子どもが・・・人生を歩んでいる』という表現については、将来的に歩んでいるという話であり、『歩めるようにしたい』という大人の想いが入っている。同様に「育んでいる」も、育てるのは大人である。「子どもが」には、このような言葉がつかないのではないかと考える。単に「つながっている」だけでも良いのではないかと考える。

また、基本目標2の文では、「が」という助詞が2回出てくる。子ども「が」・・・本「を」とすれば、良いが、その場合は「読んでいる」につながりにくい。状態を表す「ている」で締めたいという気持ちもわかるので悩ましいところである。

・日向会長

私も「であう」は「出会う」がよいと考える。本は紙というモノの集合体ではなく、魂を持つ特別な存在と「出会う」ことと考えると、この表現が望ましいと思う。

あと、「育んでいる」という言葉については、「結んでいる」、「つながっている」という言葉でも良いのではと思うが、文言を少し整理したほうが良い。子どもが読んで理解し「こうなりたい」

と思えるような文が良い。

・津村委員

本が好きではない子どもも多い。本より運動や体験で学ぶことで人生が豊かになることも多い。この方針・目標には「読ませたい」という大人の意識がある。本が好きではない子が読んでも、目標となる文言が良いのではないかと考える。こどもが「本じゃなくて図鑑でも良いんだ」と考えられるような目標のほうが、気軽に図書館を利用できるし、そこから徐々に本を好きになってもらえばよい。読書は押し付けると逃げる子どもがいるので、苦手な子どもに対してどのようにアプローチするのが気になる場所である。

・日向会長

この計画は国の計画などにもある通り、読書に特化した「読書推し」の計画であるため、読書が前提となるのは致し方ない。また、この方針・目標は大人から読書を押し付けるものではなく、子どもの「自主性」を重んじたものでもあり、あくまでも子どもの周りの環境を整えるものである。ただし、具体的な事業を検討する際には、図書館の資料を使って、実際に何かを体験するといった事業があっても良いと思う。とにかく、読書に対する子どもの自主性という基本理念は大事であり、あくまでも大人は環境を整備するだけという考え方を持っていただきたい。例えば「良い本を選ぶ」といっても、今良い本が将来も良いかわからないし、大人が良いと思った本も、それを子どもが良いと思うとは限らないので、子どもが自ら選べるような環境を整備することこそが大事である。

一方、私も気になっているのは「本」という言葉である。他の媒体ではだめなのかと捉える人もいる。図書館の資料は本だけでなく、DVDやCDなど多様であるので、実際に事業を検討する際には、本だけと捉えられないように注意を払ってほしい。

・森委員

20年間読み聞かせをやってきて、子どもは難しい本よりも、楽しい本が好きであり、冒険ものや伝記ものが好まれる。最後に怖い本を読むと喜んでもらえる。この傾向は20年通しても変わらない。従って、ジャンルを問わず、いろいろな本と出会って好きになってほしい。1人でも2人でも出会って良かったとなればよいと思う。

・日向会長

方針・目標については、基本的にはこの方向性で検討いただき、あとはパブリックコメントなどで出てきた意見も踏まえながら検討していただきたい。

・口中委員

これまでの子ども読書活動推進計画も読ませていただいたが、本協議会以外に、別途計画策定委員会もあると聞く。この運営協議会で細かい文言まで議論して決めるのか。

・日向会長

細かい文言ではなく、より大きな方向性や考え方について、区民の意識や感覚とマッチしているかを見ていただくことになる。

・事務局

委員の皆さんには区民の代表として、事務局の案を叩いていただき、皆様の意見を聞きながらより膨らまして行く場としたい。

・口中委員

これまでの計画に記載があった、家庭で10分間読書をするという取組についてはどうなったのか。

・事務局

過去の計画に記載されていても、その後の状況等により計画から除外される事業もある。前回、口中委員から紹介のあった矢祭町が取り組んでいる「家読（うちどく）」という考え方なども取り入れていきたい。

・日向会長

家庭での取り組みに対しては、あくまでも啓発である。家庭でどこまでやるべきかを数値目標を立てて、成果を図ることは難しい。

基本目標の趣旨に書いてある、「乳幼児、小学生、中学生、高校生、支援を要する子ども」という発達区分によるカテゴリ分けについて意見はないか。ただし、支援を要する子どもについては、幅が広く外国語を母国語とする方なども含まれ、年齢も全年齢が対象となる。また、それぞれの発達区分については、厳密に区分されるわけではなく、それぞれが多少被ることにもなる。例えば、乳幼児の施策も7歳くらいまでを対象とする場合もあるし、小学生といっても中高生の施策の対象となる場合もあるので注意してほしい。

・口中委員

資料に掲載されてある例で、小学生対象、小中学生対象との標記があるが、これはどのように考えるのか。

・日向会長

例えば、中学生の事業であっても高校生を対象に含む事業もあれば、対象として含まない事業もあるのでこのような標記となる。これまでの計画では発達区分ごとに事業を羅列していたため、事業の目的が分かりにくかった。今回は目的別に事業を並べ、その事業に年齢区分を記載するため、何のためにこの事業を行うかといったことがより分かりやすくなる。このように、計画の体系を分かりやすく変えていきたいということを、このイメージ図で表している。

・正岡委員

基本方針・目標ともに「人生」という言葉がでてくるが、子どもの生活に「人生」という言葉は馴染まないのではないかと考える。自主性も大事であるが「読む」という言葉は、乳幼児の場合は当てはまらないのではないかと。「本に親しみ、本を通して楽しく生活できている」といった文言でも良いと思う。人生を「歩む」という言葉についても、誰と歩むのか、同伴者が分からない。目標3についても、地域を通して本を知るのであり、本を通して地域を知るといった文言は逆ではないかと思う。また、対象のカテゴリ分けについても、最近是不登校の子どもも多く、学校・社会になじめない子どもへの支援もこの「支援を要する子ども」の中で検討できれば良いと考える。

・日向会長

不登校といった子どもについては、「支援を要する子ども」の対象である。従来は支援を要するとは、障害をもつ子どもを指すことが多かったが、何らかの形で社会が助けなければいけない子どもは全てここに含まれるものである。

基本目標1については、大人になっても読み返すといった、本が人生のパートナー・同伴者と

なるという趣旨であるため、理解はできる。基本目標3について、文言については違和感があるが、子どもが地域から分断されないように、地域とのつながりのきっかけや手段の一つとして本があるということを目指したいという考え方と理解しているが、事務局として、これらの意見があったということで、受け止めていただきたい。「豊かな人生」とは何かを定義していくことは難しいが、自治体として大きな「ビジョン」を設定することは良いことだと思う。ただ、「本を通して」ではなく「本と一緒に」というイメージの文章になれば、より分かりやすくなるのではないかと思われるので、言葉を少し練り直しても良いのではないかと思う。

・駒田委員

ぜひ考慮に入れていただきたい言葉がある。国語科の学習指導要領の関連内容である。

その中に以下の文言がある。

1年生では進んで読書をする

2年生では読書を生活に役立てる

3年生では読書を通して自己を向上させる

以上のことに重点を置く。

学校では読書指導であるが、図書館では読書活動であるため、強制ではなく促すということにはなるが、こういう文言も参考にしていきたい。

・日向会長

墨田区の教育課題には「読書習慣の形成」という言葉がある。学校で生活習慣の指導を行い、その結果、子どもたちが図書館において、自主的意思で読書活動を行うことにつながる。公共図書館と学校は補完関係である。そこでも社会と関わりたくない子どももいるので、図書館は子どもを無理やり引っ張るのではなく、子ども自らが入りたくなる環境づくりが大事となる。そういった意図を、全体として短い文に盛り込んでいくことになる。短文なので、全ての単語を盛り込むことは難しいので、ポイントや趣旨のなかで、誤解のないように説明していくしかないと思われる。

次に乳幼児の施策について検討していくが、一つ一つの取組に対して、足りる・足りないといった議論を行うのではなく、全体としての意見をいただきたい。

・齊藤委員

行政として、事業の説明等にジェンダーの固定観念を助長するような説明は避けたほうが良い。あえて固い文言を避けようとして、誤解されないようにしたほうが良い。行政にも無意識で固定観念はあると思うので、図書館として施策を考える際は、意識的にジェンダー等の固定観念に捉われないようにしなくてはいけない。

・津村委員

学校等においても、最近のお迎えは父親も多い。また、祖父・祖母のお迎えも多い。そういった意味で、私は（母さん、お父さんではなく）「おうちのかた」といった言い方をしている。

・日向会長

「親」という単語も気になる。「好きな人」という表現は良い。「親」、「保護者」という言葉は問題に感じる人も多いので、配慮する必要もあるが、「家庭」での取り組みを考える上で、親や保護者という言葉を使わなければ、誰が行うかはっきりしなくなるという問題もある。従って、文章

にするのであれば、言葉選びを慎重に行うべきである。例えば「親子」読み聞かせ会という言葉も最近では使っていない。実の親でなければ参加はできないと思われる。

また、ボランティアの「活用」という言葉についても気になる。行政がボランティアを便利に使っているという意味に誤解される場合もある。「活性化」などへの置き換えも検討して良いかもしれない。

・正岡委員

基本目標3のポイントとして記載されている「本の想いを伝える」という言葉も、具体的でなく理解しづらい。「本の想い」とは、主人公に共感するという事なのか、作者の思いなのかははっきりしない。「感覚を磨く」という言葉も、「感性を豊かにする」という方が乳幼児を主語にする場合はふさわしいと思う。

ちなみに、施策の追加の話はここで行うのか。

・日向会長

施策等の追加は、本会終了後に各自で事務局まで連絡を。ただし、細かい内容・手段ではなく、ある程度目標ベースの大きな視点のものが良い。5年間の計画であるので、細かい文言に束縛・左右されることにならないようにすべきである。

・今井副会長

「本の想い」という言葉には気を付けるべきである。「本」というと物語やストーリーのあるものを思いつきがちであるが、図鑑や自然科学に関するノンフィクションも本であり、「本」という言葉は、本来多くの意味を包含するべきものである。従って、「本」という単語が何を意味するのか、人によって変わってくるような使い方を考えていく必要がある。

・日向会長

本のシャワーや子どもが本を浴びるように読むという表現については、本に触れる楽しさを伝える程度で良いのではないかと思う。楽しさを伝え、本に出会える環境を整えるという目的が大事である。

・齊藤委員

本を好きになってもらうためには、「もう一回読んで」という言葉は大事にしてほしい。

・矢島委員

この計画が保護者にとって「本をたくさん読ませなければならない」と義務的に受け取られると良くない。子育て中の保護者は不安も多い。全ての子が浴びるほど読まなければならないと受け取られると、読ませることが目的となってしまう。「本に出会う」程度の表現が良いのではないか。とにかく、保護者の不安を煽ることにならないようにしていただきたい。

・日向会長

乳幼児期の施策としては、本に対してポジティブな気持ちになるだけで十分目的を達しているといえる。本のテーマ性などの議論は年齢が上がってきてからでも良い。シャワーという文言も、多くの本に「出会える」という発想で説明をしたほうが良い。親しい人から本を紹介してもらって、本が楽しくなるといった表現でも良いのではないか。

目標達成するためのポイントとして位置付けられている事業が、その目標にふさわしいかについて確認してほしい。なお、事業について、配布資料のように細かい手段を記載するのではなく、

対象や目的といった大枠を記載し、事業の中身など詳細は概要欄で説明すれば事足りるのではないか。

基本目標1については読み聞かせを中心にやっていくということになる。

基本目標2はあちらこちらに本があり、出会える環境を作っていくということであり、出会うために、子どもが行きそうな場所に本を置いておくなどといった考え方である。

基本目標3は図書館に来たいと思わせる取組、ボランティアの養成など人の育成等の取組となる。ただ、工作会がなぜ読書活動推進につながるのか、この資料を読んだだけでは伝わらないので、概要で説明すべきである。

イベントの実施も同様に、読書活動推進とのつながりが不明であるので、例えば「地域資料を活用したイベントの実施」など、読書とのつながりがわかるような記載すべきである。

また、乳幼児の施策としては難しいが、地域の学習コンテンツを作成していくという取組も課題である。郷土研究は行政任せではなく、住民も勉強しながら地域学習のコンテンツを作っていくべきであるので、このような取組も必要である。

なお、「リサイクル図書の提供」は、子ども読書活動推進という視点では、あえて掲載する必要はないと思われる。

「英語 TADOKU ノートの活用」事業は乳幼児の施策の位置づけでよいか。小学生でもよいのではないか。

・ **口中委員**

私も英語 TADOKU ノートは乳幼児の施策ではないと考える。

・ **事務局**

英語の事業は乳幼児だけでなく子ども全般を対象にしたものである。乳幼児の保護者も英語に対する意識が高くなってきている現状がある。

・ **日向会長 津村委員**

乳幼児は第一言語を大事にするほうが良いと考える。

・ **駒田委員**

読書の一つの目的に「語彙」の取得がある。英語に関する取組があるのであれば、語彙を増やせるような本との「出会い」の取組も欲しい。

・ **津村委員**

日本語を母国語としない家庭の子どもへの、日本語の読み聞かせなども取組として良いのではないか。

・ **日向会長**

日本語を母国語としない家庭への取組は、特別な支援を要する子どもへの施策に位置付けても良いと思う。いずれにせよ英語 TADOKU ノートや外国語を母国語とする子供への読み聞かせも、メニューとしては良いが、乳幼児に対する取り組みと限定して記載するのはいかがなものかと思う。

「文庫」の充実とは何を指すか。家庭の文庫か。

・ **事務局**

保育園にあるクラスごとの本棚や児童館の本棚の充実を指している。

・日向会長

文庫の拡充については民間活力の導入なども視点に入れてよいと思うが、そのような取組ができるような余地を持たせるため、取組の概要の中で拡充の方向性について示していければよい。

「おはなし会」の取組も複数記載があるが、取組としては1つにまとめ、概要欄で分けて説明すれば良い。

・今井副会長

計画に盛り込むかどうかは別にして、職員の研修・スキルアップなどの内部体制の拡充といった、裏方的な取組についても考えておくべきではないか。予算獲得の問題や、事業実施に係る職員のスキルの課題等もあるため、計画遂行のための内部体制について予め検討しておくことは重要であり、計画に盛り込むことで行政として動きやすくなることもある。

・日向会長

図書館職員の研修充実も大事な課題である。文庫の充実についても、バックグラウンドのサービスではあるが、どこの施設にどのような本があるかという情報共有体制の構築も重要である。本計画は住民向けの計画ではあるが、読み聞かせ等、職員のスキル向上のための研修計画、さらには、指定管理者への研修等も含んでよいと思う。なお、特別支援やジェンダーなどについての研修も必須であると思われる。「図書館の取組」欄の最後でもよいので研修的な取り組みの記載をすべきである。

「家庭での取組」は、家庭での読み聞かせ等を「呼びかける」ということになろうかと思うが子どもと一緒に本を選ぶという取組については、書店とおすすめ本リスト等の情報共有や書店作成のおすすめリストの家庭への配布といった、書店と連携して保護者が本を選びやすい環境を構築していくことについても、具体的な記載がほしい。また、「本を媒介とした家族との交流」という表現についても、家庭での取組でもあるので、あえて「家族」という言葉を使用せず、「本を介したコミュニケーション」という程度の文言でよい。

大枠としては「家庭での取組」については、これで過不足はないと思われるが、本を選ぶ取り組みにおいて、「書店と連携」の視点があっても良い。

「おうち De どくしょノート」について、タブレット等で入力できるほうが良いということはあるか。

・津村委員

紙での記録では、小さい子どもは紛失の恐れがある。

・日向会長

個人的にはこういうものは紙でも良いと思う。ぜひ活用を進める取り組みをお願いしたい。

・矢島委員

小中学生は区からタブレットが配布されているが、そのタブレットに図書館のアイコンはまだ設定してあるか。あるならばそこに読書記録や履歴が残すことができれば良いと思う。

・事務局

子どものタブレットに図書館のアイコンはある。子どものホームページから見られるかどうかは確認しなければいけないが、図書館のホームページにはその機能があり、借りた本の履歴が残るようになっている。

・日向会長

アプリであれば、借りたと同時にタイトル等が自動で記録が残るなど、手間なく読書記録ができるようになると思われるので、その点は良いかもしれない。ただ、タイトルや著者を意識させるためには乳幼児では紙で記載するのも良い。小学生高学年からは面倒になるとやらなくなってしまいう傾向があるので、電子化が良いと思われる。子どもが読んだ本の記録は、その後の読書活動においてとても重要であるので、アプリのほうが記録の消失という観点でもよいと思われる。

家庭での取組については、「親、保護者」といった言葉については、少しセンシティブになったほうが良いが、呼びかけとしては概ね方向性として良いと思われる。読書活動については家庭での取組が大変重要ではあるが、効果測定はできなもので、呼びかけに留まることになる。ただし、単に呼びかけるだけでなく、例えば手遊びを知らない保護者も多いので、動画で紹介するといったような、具体的な情報提供も併せて必要である。

本日は、細かい事業について個々には議論しないが、足りないと思われる事業がある場合は、個別に図書館に連絡していただきたい。ただし、計画段階では、あまり細かい内容まで記載しないほうが良いので注意していただきたい。

■その他連絡事項・情報提供等

・事務局 資料4 令和5年度イベント・展示一覧について説明

・日向会長

この資料については各自で確認を。

・駒田委員

「本丸書店神保町」というものを紹介したい。神保町に5月にできたもので、小さいスペースを店子が借りて、自分のおすすめの本を売るというものである。本校もこれを参考にして自分の本棚を作って、「自分の選んだ本が借りられるとうれしい」という取組を行っていきたい。

・日向会長

本を選ぶことは本質的に楽しいものである。自分のおすすめを伝えるのもうれしい。こういった参加型のイベントも図書館にあると面白いのではないかな。具体的な事業を考える際の参考にしてみても良いと思う。

■事務局からの連絡事項

6月から電子書籍を新たに購入する。

電子申請が始まり、カードがなくても使えるようになる。

ぜひこの2点について、周囲にもPRしていただければ幸いである。

■次回開催について

6月30日（日）の午前10時から12時で開催することを確認。

・日向会長

以上で令和6年度第2回墨田区図書館運営協議会を閉会する。